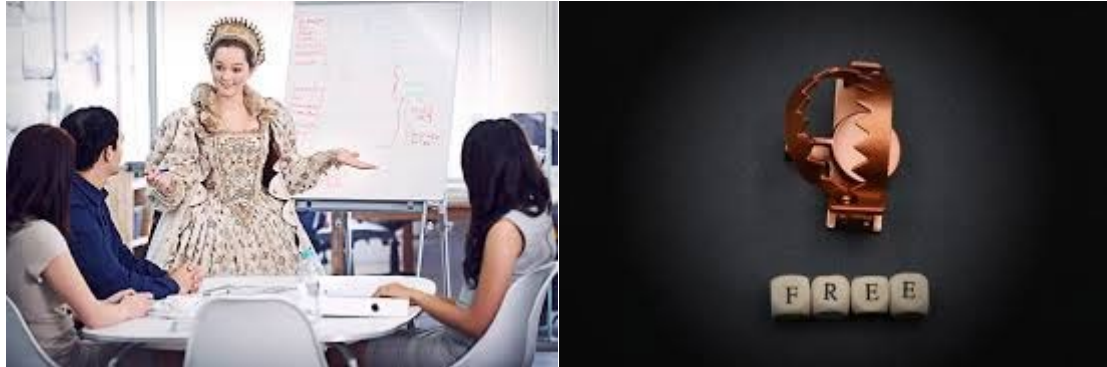


2022/2/17-4

(「義憤？」なんかズレてない?) 書庫版



もうだいぶん前になる事件ですが某大手広告代理店の新入女子社員が職場内の暴言と月120時間を超える残業を数か月強いられた後に、その後の未来を迎える事なく自死に至った痛ましい事件でした。

これを機に「働き方改革」の機運が盛り上がり現在の法整備がなされるきっかけになりました。

一方それとは正反対に、特に顧客を相手にするライン部門等では却って働き方改革による時間制限が縛りとなり隠れ残業や持ち帰り残業の横行を招いたり、残業代の減少による家計圧迫を招いたりする負の面も指摘され始めております。

今回は残業代減少の件は一旦おいて、残業時間制限を中心に「働き方改革」について考えてみたいと思います。

それにはまず新入女子社員の自殺の原因を改めてみる必要があります。

「まずは原点に返れ」

です。

記事を読み返せば冒頭に書いた二つの理由が挙げられておりました。

一つは残業時間。

今一つは職場内での暴言。

長期に渡る深残業と周囲からの叱責で心身ともに疲労困憊しているにも拘わらず心無い周囲によって次の様な言葉が浴びせられていたそうです。

「髪の毛位かきつけて来いよ。ボサボサで女子力ないよな」

以前自分もうつ病になりましたがその時の経験から

「人格を認めて貰えない職場には残業はおろか就業時間 8 時間のうちの 1 分たりとも居たくはない」

というのが本音でした。

反対にそれ迄の、ある程度裁量を任して貰え自由闊達に仕事のできた以前の職場環境にお

いては、月 120 時間はおろか 250 時間を超える残業を半年続けても苦にはなりませんでした。むしろ楽しかった位です。

その両極端の経験を元に考えてみますと

「果してこの事件の肝は残業時間だったのだろうか」

という疑問が湧きました。

「残業時間をなくせば解決するのか？」

今一つのお話は

「家事、育児は誰がすべきか？」

という記事についてです。

是も働き方改革の一環で

「男女の性差をなくし男も家事育児をすべきだ」

となり、育休や家事育児の為に残業制限が行われる様になりました。

しかし是も

「男女の性差の解消即ち男女平等の話なのだろうか？」

という疑問が湧いております。

何か大袈裟過ぎる様な気がしたのです。

個別家庭内の話に法律というかお国や自治体迄登場する様な話なのだろうか？と。

自分は男寡の一人暮らしなので、子供はもう成人しておりますので流石に育児はしませんが、仕事の他に炊事洗濯家事掃除、全て自分でしなくてはなりません。

「ここ迄は奥さん。ここから先が俺」

等と言っていない身の上です。

手隙は常時一人だからです。

そんな自分からみますと

「その時手の空いている人間がすればいいだけの話じゃないの？」

としか思えないのですが。

相手に愛情があれば少しでも手伝おうという気になるでしょうし、

愛情がない何一つ手伝いたくはないでしょう。

何か二つの話共ピントがずれている様な気がしてならないのですが。

如何でしょう。